ドリーム×マイスター

Dream×Meister

近年、大阪府のぶどう収穫量は最盛期（昭和 10 年）の約半数と落ち込みを見せる。また、ぶどう農家の高齢化などにより、山々には遊休地が目立つ。

約 4 年前、その打開策として『羽曳野市ぶどう就農促進協議会』が発足。若手のブドウ農家を育成し、後継者不足を補い、巻き返しを狙う。

NOU NO TAKUMI

上田 茂さん

竹中 巧さん

朝田 達央さん

農の匠（のうのたくみ）

葡萄

大阪府知事が「農の匠」として認定する制度。

優れた農業経営を行っていることはもちろんのこと、農業の後継者の育成に積極的で、地域農業のリーダーとして活躍されている農業者。

羽曳野市ぶどう就農促進協議会

羽曳野市ぶどう就農促進協議会のように、若手就農者育成の支援体制が整っているのは、大阪府内でもなかなかめずらしい。同協議会は熟練された技術を持つ『農の匠』3 人と、若手農業者 3 人、農協などで構成され、定例会ではぶどうの新規就農者の受け入れなどの方針を決めていく。羽曳野で 40 年間ぶどうを育ててきた、同協議会会長の上田茂さんは、『地元以外の若者がぶどうを作っている姿はインパクトがあり、良い刺激になる。熱い思いを持った後継者が、100 年以上続くこの伝統を引き継いでくれることを、素直に喜んでいる。』と話し『若い人たちの発想を取り入れ、新しい風を吹き込んでほしい。』と期待している。

大阪府の就農相談窓口

農業を始めたいという相談者は、社会人経験のある 30 ～ 40 歳代の人が多く、中には、全く未経験の方もいます。農業を始めるのは会社を興すのと同じで、強い情熱と周到な準備が必要です。まずは、どんな作物をどうやって作りたいのかという具体的な目標を立てます。そして、目標に向け、技術・知識の取得、農地の確保、機械などの初期投資や運転資金、収入が安定するまでの生活資金等の確保が必要となります。スムーズな営農のためには、地元農家など地域の人と積極的に交流することも大事なことです。

大阪府就農相談窓口
松本 裕実さん
大阪府農政室推進課
経営強化グループ内

就農者募集（ぶどう農家を目指す方）

羽曳野市ぶどう就農促進協議会では、プロの農家、JA 大阪南、大阪府南河内農と緑の総合事務所などの関係機関とともに、新たな担い手の育成に取り組みます。農業に興味のある方（35 歳以下）を募集します。9 月末まで。

問合せ

今後、2 年の研修を経て、ぶどう農家として、独立を目指している一色 謙吾さん（31）は、「やりがいが今までの仕事とまったく違う。」と充実されている様子です。

羽曳野市ぶどう就農促進協議会
☎ 958-1111 内線 2792

小林 庸恭 35 歳（ぶどう農家歴 5 年）

オーストラリアのぶどう園で農作業を体験したことがきっかけで、この世界にのめりこんだ。

現在、デラウェアを中心に 20 品種を育てる。シーズンになると、淀屋橋のオフィス街でテントを並べて、特産品を販売するマルシェなどに出店する。リピーターからは、「めずらしい品種もあり毎週楽しみ。」と人気も高い。オンライン販売なども充実させ、全国へ発送する。また、農薬を極力使わず、有機肥料で育てる、大阪エコ農産物認証も取得する。

ぶどうの新品種を研究する若手農業者 8 人で結成した組織“ファイブリッド”の代表を務める。『ぶどうの品種は 1 万を超える。8 人で、試行錯誤しながら、目の覚めるような品種を作り出したい。』と夢に向けて進み続ける。

金田 良太 36 歳（ぶどう農家歴２年）

京都にある農業法人に 7 年間勤めたが、自分で農業をやりたいという思いが強くなり、ぶどうの栽培を始めるため駒ケ谷に移住。2 年の研修期間を終え独立。栽培は『僕がいちばん下手』と言い切る金田さん。昨年、実らせすぎたため、10 ㌃の約 30%のぶどうを落としたという。そんな金田さんだが、地元の方々からの信頼は厚く人気者だ。お昼には「ごはん食べたんか？」とお弁当をいただくこともあるという。まだまだ、新米なので畑の様子を気にかけてもらい「あれやりや、これやりや」と教わることが多い。『去年わからなかった段取りの意味が、今年はわかるようになった。少しずつ成長しているはず。』と胸を張り『今後はいろんな販路を開拓していきたい。』と意欲を見せる。

上田　伸幸 39 歳（ぶどう農家歴 13 年）

ぶどう農家を営む両親を見て育った。中高生時代に手伝った辛い収穫作業の記憶が染み付き、家業を継ごうとはしなかった。

民間企業に勤めていたころ、父親が癌で他界。1 ㌶を超える畑を引き継いだ母親を、休みのたびに手伝い、疲れが溜まっていた伸幸さんは『いつまでやるねん』と母にきつくあたってしまう。母は、父が亡くなった時に伸幸さんがなにげに言った『親子三代の畑、せっかくやからつづけたら』の言葉を忘れず畑を守ってきたという。ぶどう農地を守る頑なな母の姿から、生涯、ぶどうをつくっていく決意を固めたと話す。

現在は妻と、畑にこそ出ないが母親との 3 人で切り盛りしている。4 人の子供の父親となった。子どもたちに農家を継いでほしいかの質問に『継ぎたいと思った時のため、準備はする。』と話し、『農業を多くの若い人が、職として選択するよう、良いお手本になれれば。』とこれからも挑戦を続ける。